森の名手・名人シリーズ No.23

草木染め 温故知新の染織

名人 浅野 厚子(61) 岐阜県中津川市
聞き手 志知 香澄 岐阜県立岐阜農林高等学校1年

平成17年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在38名の「森の名手・名人」を「森の"聞き書き甲子園"」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1. きっかけ

結構、個性が強いというところだったかもしれないけども、何か、糸もオリジナル、自分で作れたりとか、糸なんかも染められたらいいのになあって。ある日、ポストにポスターが入ってきたのよ、草木染の糸を染めませんか?って。すぐ訪ねて行ったの。そしたら、そこのうちの目の前に、織機があったの。結城紬だとか、こんなの織れるといいなとか思ってたの。これは私が、探してたんだってことで、その教室、入っちゃったの。ついでに、織りも習ったの。そしたら、やっぱりどんどん織りの方に偏っていくのね。面白くって。あと、東京テキスタイルってのがあってね。また凄い、洋ばたでね。全然違うもの織ってるわけ。織りの世界深いんだって思って。二股かけて、そこも入っちゃったの。

2、3年ぐらい勉強したかな、働きながら。それで、東京の近郊の山へ草木、取りに行ったりしてたから、車なんか乗れない歳取った時に、目の前に植物がなきゃ染められないから、田舎へ移りたいなあって思って。それで広島でね、一軒、家を借りて、教室開きながら、本当に初心の草木染をやったんだけども。

本格的に染色の道に入ったのは、お教室やってるうちに、ホントに山に入ってやりたいなって思いだしたもんで。たまたまこちらの方に知り合いがいたもんでね、それで、中津川に移り住んだんですよ。

2. 染めの深さ

着物が好きだからね。紬の着物織ってるんですよ。あと、ショールとかマフラーね。で、素材は、絹が主なんですけども。綿は、草木染は、普通は染まりにくいんです。絹とかウールは何も処理しなくても染まるの。でも綿だけは、そのままつけても染まらないの。色があんまり発色しないのね。

日本の代表的な染めは、今でも残っている、藍染と山形の紅花なの。藍の場合は、葉っぱを採ってきて、それに水をかけてむろでむらせて、ぶわぁって醗酵するのね。ものすごい高熱が出て。その醗酵したのが、すくも。玉にして、建てる時も、藍は醗酵させてたてるわけ。常に、藍の花ってブクブク泡だった形になってるわけね。紅花も、草花だから煮れば出るかって言ったら、それも駄目なの。紅花も、焙煎剤っていうのか、今は薬品使ってるんだけども、そういうもので、紅花の色の黄色い色を分けてそれから紅の色出すようなやり方があるんですよ。これがなかなか難しい技法で、簡単には出来ないんですけど。私、一生懸命努力して、自分のものは作ってますけどね。

山の植物だと、黒って色がないの。黒も作らなきゃいけないから、これは秋に紅葉したウルシを採ってきて置いとけばいつでも使えるんですよ。黒の色って、いろんな色を作っていって黒になるじゃないですか。絵の具なんかでもそうでしょ?: 私も最初ね、絵を描くこと分からなかったから、ただ漠然と染めて、何か色が単調で、深みがなくてつまらなかったのね。織った作品に、こう、重厚感がないのよ。私は、お弟子に入ってなくて、独学だから。どうしたらいいのかなと思って、ある日、絵画を見に行ったの。有名な絵描きさんの絵って、油絵って、上にコテコテ塗り重ねてるじゃありませんか? それを見たときに、絵っていうのは、色を塗り重ねて色を出すんだ、表現するわけじゃない? それを思い起こして、何か色を出したければ、その色を染め重ねていって、その色を出したらいいんじゃないかなと思って。何色が出るかは、もちろん、未知数で分からないから。まして、自然の草木のことですからね。そういう工程で、黒をやったわけ。だいたい、基本的に何と何ってのがあるわけでしょ? で、それをかけたら、見事な黒になったのね。化学染料みたいに、ポーンといれたら黒になるわけではないから。そういう意味では、非常に深い。絶対、同じものはないわけ。山の植物の量なんて、測ったって、絶対一緒じゃない。まず、同じ色は出ない。そこで、昔の職人さんは、そうやって同じ色出したのは凄い努力だなって思うし。でも、私は出なくてもいいと思ってるの。そこが飽きない面白さっていうのかな。草木染と織りのね。あと、織っちゃうとまた深い色があって、染めた色もいろんな色を合わせていって。草木染は、どんな色持ってきても、ケンカしないの。だから、現代の洋服の上に、草木染のショール引っ掛けたって、全然違和感ないんですよ。

▲染色作業

▲機織り縦糸セット

▲織機全体(正面)

▲綜絖(そうこう)

▲おさ

▲ちまき

3. 伝統と現代の組合せ

伝統的技術って、守られてけば私は良いと思うの。昔のものは、素晴らしいものであるけども、時代に合ったやり方で、みんなに見てもらおうということをしていかないと。やっぱり、身近に手にとって、昔の伝統的な物を身に着けてほしい。自分がやりたいなって研究しながら、伝統を重んじてどうのってゆう重苦しいことじゃなくて、伝統の良さを、手作りをして見なきゃ分からないでしょ? これ大変な工程で、専門分野に任せて、なるべく良い仕上げしてくれた素材を、また仕入れて自分で作ろうということもいい訳ですよ。ただ私は何かやると、この根源は何から始まったんだってことが知りたい性格なんですよ。だからね、綺麗に作ったら凄く伝統物で素晴らしいんだけども、また、手間のかかること、無理してなくても、それをまた上手く利用して現代風にすると凄くいいしね。でもね、織るの大変なの、凄く。若いうちは挑戦。これからやろうったって出来るかどうか分かんないけども、挑戦してきましたね、その20年の間に。だから、技術的に難しい、ま、出来る限りは、その昔ながらの技術をやるんですけど、教えてくれる人がいないと、それもどうしようもないし。でもその中で、自分で研究しながら、自分なりのやり方でね、織物を今風に使えるように織っていけばいいかなと思って。そうすれば何とか生活になるかなと思ってんですけど。

▲個展状況

▲浅野さんの作品/ショール

▲浅野さんの作品/着物

4. 個展

個展活動をやると、面白いのね。お客さんが色んなアイディア教えてくれるのよ。自分一人で閉じこもって織ったって、決まったパターンのものしか出来なくなるのよ。「私、こんなの欲しい。でも、もうちょっと、これ、こういう風にならない?」とか言われてね。それが、良いアイディアになったり、良い勉強になったりでね。そのお陰でずいぶん進歩したわね、私の作品も。個展はね、今までに一年に2、3回開いてきた。で、23年間やね。途中、ここ3年ほど身体壊して、しばらく個展開いてないけど。個展では、私、着物好きだから、必ず着物を中心にするの。あとは、テーブルセンターだとかマフラーとか絹のショールだとか、ウールの藍染のロングマフラーだとか。あとは、インテリア、って言っても、ついぶとかドアも作ったし。まぁ、その時の思いつきで、奇想天外な物も考えたりしてさ。それで、家に作品、一つも残ってないのよ。みんな売れちゃって。おかげさまで。

個展開く時にね、例えば、大判のショールなんか作ったりするじゃない? ショール織る時に、これは、こんな人が着ると良いかなってイメージわくのよ。誰か、買ってくれる人があるからね。そうすると不思議にね、そのショールに似合う人が現れるのよ、いつも。ぱって入って来て、「あっ、この人に似合うな。」って見つかるのね。それで、長いこと見てるなー、気に入ったなーって思うと、側行って、「ちょっと、これ、あてがって下さい。」って、あてがうとね、スポッと入っちゃうの、その人に。やっぱ、自分のイメージを考えて織ってるから。それが不思議ね。その人が現れると、ちゃんと売れるの。この人に合うなぁって人に買っていってもらうのが一番嬉しいね。

5. 創るということ

創る事、創作っていうのは、その時ひらめいたことで織るから、同じものは出来ないしさ、だから、勿論、忘れないように記録はしてるけれども、あえてそれを同じように織ろうとは思わない。それをやる時はまた、違う手を考えてやりたい。もっともっと、自分の脳の中にアイディアが溢れるくらいにして、仕事したいと思うもんで。評判良かったからって、また、織ろうとは思わないわね。その人に似合ったんだから、もう、それでいいと思う。これから、この家の二階でやろうかなと思って。今度は、遠くなんか行かずに、地元でゆっくりやろうかなと思ってさ。一人でやると、ちょっと量もいるし、どんだけできるかまだ分からないから、まぁ、ちょっとグループ展くらいにしようかなと思ってるんだけどね。しばらくお休みしてたから、どんなものを作るのかなって、それは自分に対して自分が楽しみだね。

名人 浅野厚子(あさのあつこ)さんのプロフィール

●生年月日:昭和19年3月13日生まれ
●出身地:大阪
●職業:染色

16歳で父親を亡くした。その後、東京の料理屋で働きながら、東京ドレメ系洋裁学院、ヴォーグ編物学院、日本伝統芸術学院、東京テキスタイルなどを就学。
1981年、東京テキスタイルで出会った友達に勧められ、広島へ。そこで、テキスタイルの教室を開きながら、山陰地方のかすり、絹糸作り、藍建てなどを研修。
1983年、現在住む、岐阜県中津川市の夕森公園内に引越す。その後、日本各地でグループ展や、個展を開催。現在は、中華料理屋を営みながら、染織を続けている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
公益社団法人
岐阜県緑化推進委員会 佐藤正吉】